

がく どう そ かい 学童疎開

たいへいよう せんそう
アジア太平洋戦争が激しくなると、都市
こく みがっ こう
の国民学校の子どもたちを地方に疎開
そ かい
させる政策がとられました。地方の親戚な
えん こ そ かい
どを頼って疎開（縁故疎開）したり、学校
ごとにまとまって疎開（集団疎開）したりし
ましたが、何らかの理由で都市に残る子
どももいました。

た なし ほう や
田無町、保谷町は集団疎開を受け入れ
ない地域でしたが、とう きょう こう とう し はん
東京高等師範（現筑
ふ ぞく こく みがっ こう
波大学）附属国民学校の児童約210名が、
保谷町にあった同校の農園とその近くの
施設（民族学博物館）に一時、集団疎開
く しゅう
をしてきました（この地域に空襲の被害
が出ると、新潟に再疎開）。

また、縁故疎開で区内からやってきた
子どもたちもいました。



図 北多摩郡・学童集団疎開受け入れと再疎開



民族学博物館
(1939(昭和14)年～62(昭和37)年、内1944(昭和19)年～1946(昭和21)年 休止)
1944(昭和19)年9～12月、本館内の陳列場を区切って、学童疎開教室
に転用されていた。 持嘉一郎氏所蔵、神奈川大学日本常民文化研究所保管



筑波大学附属小学校保谷田園教場（現在）